

序

長年、イベリア半島の幻影がわたしの脳裏を離れないでいた。中世から近世へと日本が脱皮を始めた15世紀の頃、九州の片田舎でしかない大分が、ヨーロッパ世界にとって最も遠く、最も魅力のある国として知られていた。その時代に日本を訪れた彼の地の人々の故地こそが紛うことなくイベリア半島であった。

そのイベリア半島を歩いて、万里の波濤を乗り越えて日本に来た人々を、包み込んでいたであろう風に吹かれてみたいと夢見ていたのだ。夢見ながら随分と長い時が流れた。それには恥ずかしい訳がある。イベリア半島を訪れる時にはまず行っておかなくてはならないところがあり、その場所に行くことに恐怖にも似た抵抗感があったため、躊躇していたのである。

2014年5月、ようやくわたしはその場所に立つことができた。その場所とは南島原の原城址である。繰り返すが、わたしは原城址には長い間、尋ねる勇気を持てなかった。三万余の人々が家畜を殺すように屠られたその現場に立つ勇気がなかったのである。この時の旅でも、初めは避けるつもりであった。

わたしはまず天草を訪ねた。詳しく言うなら天草下島の河内浦にある信福寺という浄土宗の寺である。そこはルイス・デ・アルメイダが最晩年を過ごし、そこに葬られたと言われている。近世の夜明け時期の大分を彩ってくれた二人の南蛮人の一人がルイス・デ・アルメイダである。残念ながら、現在の信福寺のどこにアルメイダが眠っているかは、豊臣・徳川の政権交代時期の戦乱のどさくさで判らなくなってしまっていた。それでも天草氏の居城河内浦城址やコレジオ跡、崎津の天主堂などを見て回り、アルメイダの遙けき憂愁に思いを馳せることができた。

その彼の終焉の地を訪ねる旅の途中で、わたしは天啓のごとく鈴木神社の存在を知った。この神社は島原の乱での軍功を認められ、直後、旧領主が変わって天領となった天草の代官として赴任した鈴木重成（しげなり）を祀っている。鈴木重成は乱で荒廃した天草を復興させるために尽力しただけでなく、検地をやり直して間違いを是正し、それまでの天草の石高4万2千石を2万1千石にするよう幕府に上申した。前例がないと拒絶する幕府に対して、受け入れられるために自らは自刃することで一命に代えて訴えた。結局、幕府は事態を重く見て石高減を実施している。のちに重成が自刃してまで自分たちの苦衷を救おうとしてくれたことを知った島民たちが神社を建立したのだ。

鈴木重成は天草・島原地方の各所に放置されていた屍体を、幕府方一揆方の区別なく集めて茶毘に付し、千人塚を何か所も建立している。幕府方にもこんな人物がいたことを知って、わたしは初めて原城址に立つ勇気があることができた。

原城址は拍子抜けがするほどに、あっけらかんと明るかった。三百数十年を隔てた昔、この地で三万余の命が失われ、葬ることを禁じられたため白骨が累々と野に打ち捨てられていたという。その原城の城頭に立っても長閑な春の海と暖かい南国の空が広がっていた。この地を踏むことに恐怖を抱いていた自分がむしろ可笑しかった。

2014年7月14日から31日まで、わたしはイベリア半島を旅した。ようやくにして叶った旅である。ポルトガルではアルメイダの生地を訪ね、大友宗麟たち九州のキリシタン諸大名が送った天正遣欧使節の少年たちに所縁の地を踏んだ。スペインではフランシ

スコ・ザビエルの生地ハビエル城を訪ね、伊達正宗が野望とともに派遣した慶長遣欧使節の支倉永常たちの住み暮らしたコリア・デル・リオまで足を延ばした。

わたしの感動はそれこそ筆舌には尽くせないものがあった。わたしのふるさと大分では、宗麟の時代の南蛮文化、キリシタン文化の開花と顛末を、市民共通の誇りとし、詩の情報発信の核に据えることになった。わたしの旅の印象を拙い報告書であってもまとめておくことが、彼の地を旅することができた者のふるさとへの感謝の形かと考えているところである。

願うらくは大分とポルトガル・スペインの時空を超えた交流について思いを馳せながら、わたしの感動にご理解を頂ければ幸いなること、これに過ぎることはない。

2014年8月末日



天草市河浦の信福寺

この寺のどこかにルイス・デ・アルメイダは眠っている。彼が万里の波濤を越えて日本に渡来し、献身的な活動をするに至った、その背景を知りたいと、わたしはこの山門の前に立って、合掌し願った。その念願がかなって、アルメイダの生地を訪ねることが出来た。



天草市本渡本町にある鈴木神社

自らの一命と引き換えに天草の窮状を救った鈴木重成を祀っている。長い日本の歴史の中でも3万余の人命が一方的に殺戮された例はない。わたしはそのことの異常さに、強く畏怖するものがあったが、偶然知ったこの神社の存在で救われた気がしている。



南島原市の原城址から見える島原の海すぐそばには骨嚙（ホネカミ）地蔵というおどろおどろしい名前と呼ばれている地蔵尊が祀られているし、千人塚と呼ばれる供養塚もあるというのに、城址には柔らかな光があふれ、海の色は折からの春の陽光を穏やかに反射させて、あっけらかんと明るかった。